

## 第 28 回会長の時間 ロータリー創立記念日につきまして 2月23日

先週の2/18に行われましたG-1・G-2合同IMにご参加頂きありがとうございました。IMの報告は3/9に木下さん・川戸さん・古谷さんにして頂く予定です。さて、本日の2月23日は、ロータリーの創立記念日ですので、これに因んだお話をさせていただきます。ポール・ハリスは1896年にシカゴで法律事務所を開きました。ロータリーの資料によりますと、弁護士の仕事は順調でしたが、シカゴは生まれ故郷でなく、親友というものもおらず、シカゴでの生活は孤独であったと述べています。そして、ある晩、ポール・ハリスは弁護士の友人に連れられて、郊外の彼の家を訪れました。夕食後、近所を散歩していると、友人は、店の前を通るごとに、店の主人の名を呼んで挨拶するのです。これを見て私は、ニューイングランドの私の村を思い出しました。そのとき浮かんだ考えは、どうにかしてこの大きなシカゴで、さまざまな職業から政治や宗教に関係なく、お互いの意見を広く許しあえるような人を選び出して、親睦関係をつくれぬものだろうかという考えを抱きました。こういう親睦関係ができれば、必ずお互いに助け合えるのではないかといった内容を、著書『ロータリーへの私の道』に書いています。

その考えをしばらく一人で温め、今から112年前の1905年2月23日に、弁護士のポール・ハリスは3人の仲間と会合を持ちました。その時の仲間とは、石炭商シルベスター・シール、洋服仕立て業のハイラム・ショーレー、鋳山技師のガスターバス・ローアです。この会合は、シカゴのダウンタウン、ユニティ・ビル711号室、ローアの事務所で聞かれました。「ロータリーの友」の資料によりますと、残念ながら現在そのビルは残っていませんが、跡地前の歩道には、そのことを記した小さなプレートが埋め込まれているそうです。また、エバンストンにある国際ロータリー世界本部の1階にその部屋が再現されております。この最初の会合こそが、後に200以上の国と地域に広がり、約3万5,000のクラブと120万人以上のクラブ会員を有するようになったロータリーの第一歩でした。ポール・ハリスは同書に、ロータリーについて次のように書いています。「シカゴという大都会に集まった、この小さなグループの会員にとって、ロータリーは砂漠のオアシスのようなものでした。しかし、彼らの集会は、今日のほかのクラブの集會とは違って、もっと親密であり、はるかに友情がこもっていました。面倒な、意味のない制約は振りすてられ、もったいぶったとりつくろいは入口で断られます。会員たちはみんな少年に戻るわけです。私にとって、クラブの集會に出席することは、あの谷間の家に帰るのと同じことだったので

す」

「あの谷間の家」というのは、彼が少年時代を過ごしたウォーリングフォードの祖父の家のことです。私たちにとって例会は、ポール・ハリスのいう「砂漠のオアシス」「なつかしい故郷」といった場所にはたしてなっているのでしょうか。入会して間もない人は、例会は、オアシスどころか緊張する時間だと言われかも知れません。しかし、ロータリーの在籍期間を重ねるにつれて少しずつ例会が居心地の良い、ほっとする場所に変化していく場所になると思います。入会后、間もない方は、積極的にクラブの行事やボランティア活動に参加して頂き、またその際には、先輩の会員方に積極的に話しかけて下さい。きっと優しい言葉で対応して頂けるはずです。こういった私たちの一人一人の行動が、クラブの例会をオアシスにできる手がかりになるのではないかと思います。本日は、112年経過しましたロータリー創立記念日についてお話ししました。